

# Transcultural Studies Newsletter

## No 8

Spring 2023

秘密の桃源郷

クリストファー・リーブズ

White Power and Neoliberal American Culture

Edward K. CHAN

コロナ禍前後の“就活”

—就職はゴールではなく、ひとつの始まりに過ぎない!—

源 貴志

なまくら知識の重要性

長谷川隆一

「世界」を切ること、結ぶこと

三浦 領哉

私の履歴書（抄）

山吉 領平

# 第八号

# 多元文化論系 ニューズレター

## 秘密の桃源郷

### クリストファー・リーブズ

リーブズ (Reeves) と申します。国際日本文化論プログラム (JCulP) および多元文化論系の授業をいくつか担当している者です。半年ほど雪に覆われるカナダの平原に生まれ、何らかの縁で二十一・二歳頃、本国の熊本県の西海岸に漂着した。当時は小川町おがわまちと言っていたが、今は宇城市うきとなっている。のんびりとした町で、桜や梅の老樹が咲くと近所の人々と集まっては、酒を飲んだり民謡を歌ったり、夕方まで遊んでいた。相手はみんな「老人会」の会員だったので、僕の事を「老人会名誉会員」と任命した結果、毎年老人会で開く花見に配る弁当までもらえた。夏は仲の良い住職さんのお寺を我が家の如き入り込んで、仏壇の鈴りんを静かに鳴らしながら御経を我流で朗読した。山の方で捨てられた子猫を二匹とも拾い、家の中で一年ほど楽しく飼った事もある。町を離れた際は、仲の良い農家に引き取ってもらった。二年後、ふたたび小川町を訪れる機会があったので、その農家のお宅に伺った。すると、猫二匹とも大きくなり、トラクターの上で心地よく日向ぼっこしていた。ほっとした。因みに、猫を拾った時に着けた名前は「ここ」と「そこ」だった。



小川町の老人会が僕に残した影響は甚だ大きい。今までも続いている。日本に漂着した当初、日本語はちっとも通じず、本国の風俗や文学に関しては無知に等しかった。そのおかげでか、眼まなこに映るもの、耳に入る音、すべてがこよなく珍しく感じた。仕事は案の定英語の先生の助手だったため責任が少なく、放課後は完全に自由奔放な時間になるわけだ。学校から家に戻っては、すぐさま隣のお宅——勿論老人会の仲間——にあがって、手作りの漬物をかじりながらそこに集っている会員たちの雑談を耳にした。このように毎日の繰り返しで、知らず知らずのうちに日本語が分かるようになった。またある日に、近所のご主人が唄うたを歌ってくれた。途中で涙を流した。「この曲はお坊さんと若い女子おんなごの恋愛話だよ」と言って、そしてこのような唄は「浪曲」と呼ばれている事を教えてくれた。こんなに感動するものならばもっと知りたいという自分の気持ちを伝えたら、「ならば、『万葉集』を読んだら」と勧め

めてくれた。

助言に従った僕は、学校の図書室から借りた『万葉集』第一巻と、町にある唯一の文具屋さんで入手した古語辞典を机に並べ、毎晩少しずつ一語一語解説してみた。理解に窮する箇所につつかると、翌日、勤め先の国語の先生に説明を請うた。地味な作業だが、たいへん楽しかった。誰一人も未だ嘗て踏み入った事のない秘密の桃源郷を悠々と彷徨っている気分だった。古今の先哲がすでに『万葉集』をぞんぶん吟味してきた、という事実を頭のどこかでは分かったはずにもかかわらず、『万葉集』は誰も繙いたことのないものだと勝手に思い込んでいた。心というのは妙なものだ。理性を見向きもしない妙なものだ。少なくとも僕の心はそうだ。兎も角、『万葉集』を読むに連れて日本古典文学の世界に対する興味がどんどん湧いてきた。次いでは『古事記』も何遍も読んだ。なお、幼少期はカナダで過ごしていたが、これもまた不思議な縁で、中国人と仲良くなり、中国語（北京話）を不自由なく話せるようにまでなっていた。もとより古いものを好む僕は自然に中国の古典文学に興味を持って、『道德経』を筆頭に、四書五経や漢訳仏典を適当に摘まんだ。そういうわけで、日本文学の世界に入っても、やはり、漢文が魅力的だった。『懐風藻』や五山文学の漢詩をよく読んだ。一時期は、日本漢詩を中国語で朗読することに夢中になった。

小川町の老人会で聞いた浪曲をきっかけに、僕は日本古典文学の世界に導かれた。今もその世界に彷徨っている。しかも、いくら先哲の研究が蓄積されても、僕は（たとえば）平安初期の漢詩を読む度に、ああ、この詩は誰も読んだ事がなかろう、僕こそはじめて発見したものだ、と変に——しかも頑固に——思い込んでいる。理性を背くころの妙な錯覚かな。いや、錯覚ではなかろう。あの誰一人も未だ嘗て踏み入った事のない秘密の桃源郷は確かに存在している。いくら先哲と言ひ、先行研究と言っても、ある文章を吟味するとは、あくまでも一人で踏み入る事になる。先哲の見識にしても、授業中で聞いた先生のお話にしても、これもあくまでも他人の経験談にすぎない。自分らで入ってみないと桃源郷に秘められたものは永遠に分からない。先ほど諸君に告白したように、僕は非常に頑固なところがある。自分が吟味して感動した文章は自分しか読んだことのないものだと思い込んでいるのだ。この文章は自分の私物だと最後まで固執する。いくら他人が読んでいても、これはあなたのものではなく僕のものでこそあれ、と盲信する。この愚頑な心を持って余している一方、同じくこの愚頑な心に救われている。自分がせつ

かく発見した秘密の桃源郷に誰でも無断立ち入りできるようにになったら、秘密が忽ち消えてしまう。秘仏の魅力はその像自体にあるというよりは、専らその秘めてあるところに存ずる。

厨子ずしを開いて参拝者の目に晒すと仏像の魅力は次第に衰える気もする。僕が漢詩を吟味した際に発見したいろんな秘密は自分一人で味わいたい。気軽に人目に晒さらしたくない。敢えて晒したものはあくまでもその後味にすぎない。本当の味ではない。

人に見せたくないというよりは、むしろ、仮に見せたくても見せきれないものがある。僕は往々授業中に『古事記』の神話について話す。

ある時、太陽の女神である天照大御神あまてらすおおみかみがあまりにもひどい目に遭ったので、怒って洞窟に隠

れたつきりで、もう二度と出てこない。しかし、太陽の女神だから、洞窟に隠れると空は真っ暗になる。恐らく日食の由来を説明する、いわゆる神話的起源説だろう。天照を引き出すために、天鈿女あめのうずめは恍惚状態に入り——神憑りだろう——ほぼ裸になった姿で踊りまわる。すると、その場に集まっていた八百万の神々は大きな声で笑った。不審に思った天照はすこしでも扉を開けて様子を伺おうと、力持の神は隙間を狙い天照を引っ張り出して、そして二度と洞窟に戻れないように注連縄しめなわを渡した。鈿女の踊りはどんな踊りだった。神々がなぜ笑ったのか。『古事記』の本文はなにも教えてくれない。鈿女はシャマン——いまで言うお巫女さんの原型——であり、その踊りは急になくなった太陽を呼び戻すための神秘的な呪術——神憑り——であろう。神々の笑い声も悪霊を払うための呪術だろう。けっして鈿女が裸になった姿を面白がって笑ったのではない。興味あれば、是非ともこのあたりの研究に詳しい先哲に聞いてみてください。僕のこの説に賛成してくれるかどうかを尋ねるとよい。何を言いたいかという、僕が『古事記』を読んでいる際に、何を見ているのか、何を感じているのか、どんな声が聞こえてくるのか、今まで見聞したものとどういふふうに響き合っているのか云々は、学生さんに伝えたくても伝えきれない。僕特有の『古事記』がある。自分の桃源郷がある。秘密のない読書は読書ではなく、単ある情報集めにすぎない。人間のこの妙な心は理性や情報を求めている。秘密を求めている。



「秘密の桃源郷」を匂  
わせるタロット

# White Power and Neoliberal American Culture

**Edward K. CHAN**



What does white extremism have to do with a seemingly race-neutral conception of economics? This is the question my coauthor—Patricia Ventura of Spelman College in Atlanta, Georgia—and I try to address in our book *White Power and Neoliberal American Culture*, published by the University of

California Press in April 2023. We draw on our past work on the cultural manifestations of neoliberalism in the US (Ventura) and race in American utopian fiction (myself). This is unfortunately a timely question, when US society is polarized not just by economic inequality but also racialized politics that result in extremism and domestic terrorism in the form of mass shootings and even attempts to sabotage power stations and other infrastructure to start a race war—sometimes referred to as RaHoWa or racial holy war—that many white power advocates hope to start through what is referred to as “accelerationism.”

While reading and writing about novels that call for or imagine “America” as a white utopia is far from the pleasure we often associate with reading and studying literature, these are texts we must confront especially in these days when there is a disturbing resurgence in the US of white supremacist extremism and, as disconcerting, politicians (like the guy with the orange face and fake hair) and media figures (like the guy who claims to know how “white men fight,” even though he looks like he’s never been a fight in his life, and was fired from that right-wing fake news network) willing to pander to the full range of white identity politics, from white supremacist extremism to pasty nostalgia rooted in an unspoken racialized past to backlashes against civil rights for women and sexual/racial minorities rooted in the cultural

pluralism and diversity that “America” often claims to represent. Even more unsettling than these novels are the manifestos written by extremists who engage in mass murder in their devotion to what we have taken to calling, along with other scholars, “white power,” as the most recent form of white supremacy since roughly the 1960s.

The recent mass shooting in Texas on May 6, 2023, reveals that the notion of whiteness as a racial category is riddled with contradictions and ambiguity, as is the case with the long history of racial thinking, most strikingly in the history of western racial science from at least the 1700s with its attempts to empirically measure things like skull sizes and categorize people into different races. The Texas shooter identified as “Hispanic” (one of many ambiguously racialized categories), but he still believed in a white supremacy that usually considers such people as nonwhite and therefore inferior. Nevertheless, his killing of eight people and wounding of many others on a Saturday afternoon in a crowded outdoor mall is part of a larger trend of mass shootings in the name of white power ideology, which is not restricted to the US since it also occurs in places like Norway and New Zealand.

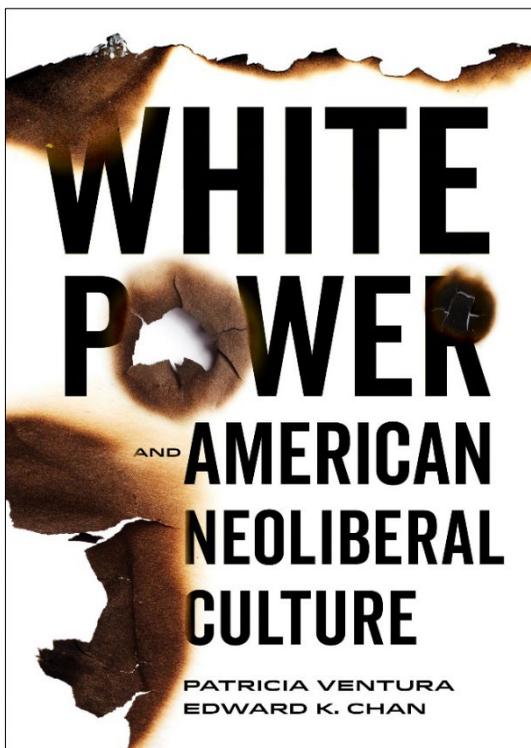
Neoliberalism is also not necessarily a fun topic to research and work with, but like white power, it is a reality we have to face and comprehend. We approach neoliberalism as the current form of what political theorist Cedric Robinson theorized as “racial capitalism” arguing that the logic of racialization existed before capitalism arose in Europe and helped shape capitalism’s evolution into the hegemonic mode of production (chattel slavery being one incredibly convenient way to expropriate labor). In the US, neoliberalism arose roughly in the 1970s, flowering in the 1980s and heralded in President Ronald Reagan’s famous pronouncement as he took office: “Government is not the solution to our problem; government is the problem.” Reagan and his cronies institutionalized the drive to scale back government and allow free-market logic to colonize every aspect of our lives. Moreover, both the Republican *and* Democratic political parties help perpetuate the neoliberal regime.

What we try to argue in our book is that there is a Venn diagram that includes significant overlap between neoliberalism and white power, resulting in attempts to define the “traditional” heterosexual nuclear family

in which a man presides and a woman produces children. In neoliberal ideology, this family structure replaces state-sponsored social support systems that have historically been provided by government. For white power advocates, it rescues the supposedly threatened white race, enshrined in the white power mantra known as the “14 Words”: “We must secure the existence of our people and a future for white children.”

If you’d like to hear more about these issues, but don’t want to read the book—and who could blame anyone for not wanting to—Trish and I were interviewed on May 12, 2023, on the radio show Leonard Lopate at Large on WBAI in New York City:

<https://soundcloud.com/leonard-lopate/white-power-and-american-neoliberal-culture>.



## コロナ禍前後の“就活”

—就職はゴールではなく、ひとつの始まりに過ぎない！—

源 貴志

100分授業となってもう2ヵ月が経過したものの、いまだに慣れない。授業の開始時間は覚えたものの（それでもいまだ13時ちょうどに教室に行つて、「あれ、まだみんな来てない？」と思つたりするし）、終了時間はいちいち時計を見て考えなければならないありさま。昨年度までの90分の時間割がもはや生物時計のように身につけていて、なかなか切り替えが利かない。長年の習慣というものはおそろしい。

だが、考えてみたら、10分休憩から15分休憩に変更されたのもそれほど昔のことではない。学生のころは、1限は8時20分はじまりだったし、5限は17時20分に終わっていた——というのは太古の昔のはなしにしても、大学のなかの生活も、大きくは変わらないようできて、つねに変化しつづける。「2014年度までは土曜日にも必修科目が置かれていてね」などと言っても、学生は信じられないような顔をするばかりだが、おちついて振りかえてみれば、意外に短い期間にいろいろの変遷を経ている。

学生のあいだで使われる言葉の変化となると、もっと激しい。「遠くて」などはもはや、〈少なくとも自分は使わない〉と意地を張るのが精一杯のところだし、「連休前ぶりだよ」という「…ぶり」の使い方の急速な普及にだっていちいち目くじら立ててはいられない。

しかし、やはりおちついて振りかえてみると「就職活動」という言葉が「就活」と省略されて使われるのが普通になったのは、それほど古い話ではなかったように思う。もっとも、5年以上前のことをつい「最近」と言ってしまうようになって、「最近」という言葉を自らに禁じているような世代の人間の言うことだから、あてにはならないが。

「就活」という言葉を現役の学生だった頃に使っていた世代の人たちが社会の主流を占めるようになって、そろそろその子どもの世代も大学生、というようなことになると、「就活」という言葉は、学生と、せいぜい教員のあいだのスラング的な性格を脱して、一般に認知される言葉になった。すると、この省略語法はさまざまに応用されるようになる——「婚活」「妊活」などは文字入力でもちゃんと変換されるし、「パパ活」なるものがNHKの番組で講義(?)されてから（わたしはそれで学習した…）、6年が経過している。「シェーカツ」そのものにもバリエーションがあって、社会人生活は「就活」に始

まって、「終活」に終わることになっている（後者もちゃんと変換される）。

学生が授業を休む理由として「就活」を挙げてくることは、教員としてははるか昔から日常的なことになっているとはいえ（かつては、学業か就職活動かというせめぎ合いの時代はたしかにあった）、昨年の夏クォーター科目が始まって驚かされたのは「インターンシップのために休みます」という連絡が複数来たことだった。もちろん、インターンシップそれ自体は大学でも奨励していることだが、聞いてみると就職活動の一環としてのインターンシップだという。これはいま始まったばかりの今年の夏クォーター科目でも同じことが起きている。

インターンシップが就職活動の言わば第一段階のように言われるのも「最近」(!)のことで、ましてそれが就職と直結するというようなことになると、〈大学生の社会人経験という本旨からはずれていやしないか〉——などと、うるさいことを言うのがもはや野暮というものかもしれない。それでも、インターンシップは3年生の夏休み、というのが一時期の大勢であったように思われていた。

それが昨年、3年生の6月という時期に複数の例が現われたので、気になって就活関係のサイトをいくつかのぞいてみると、長期休業中に行なうことを奨励こそしてはいるものの、一方で——大学3年生の6月頃から——という表現も見られて、これは上記の実際の学生の動きとも一致する。

昨年の3年生（いまの4年生）と言えば、2020年度の入学。いきなりの全面オンライン、2年生になってようやく制限付きのキャンパスライフが始まって、それからまだ1年と少しというところで、もう就活のためのインターンシップ！〈可哀想〉と言うのも愚か、かなり深刻な問題のように感じる。

もちろん、若い人の適応力とか柔軟性というものは、疎かにはできないもので、1年が経過した現在、ゼミの学生（2024年3月卒業予定）に尋ねてみると、なかには昨年の6月から〈就活の最初の一環として〉インターンシップを始め、それが直結するかたちで3年生のあいだにすでに事実上の内定が出たという人が複数出ている。就職がそれだけ早く決まれば、4年次はそれだけ学業、とくにゼミ論文の執筆に心置きなく没頭できるというもののだが、一方で、まだ進路が決まらず、就活を続けている人にとっては、乗り遅れたという不安が強いだろうし、いまの3年生にとっては、焦りと不安のものになっていることはまちがいないだろうと思われる。

ただ、〈直結〉といってもいろいろあるようで、インターンシップでの評価が高いと、1次考査が免除になるケースもあれば、その企業でのインターン

シップがそもそも必須という例もあるようだ。

昨年から急に就活の時期が早まったことがやはり気になって、コロナ前あたりまで遡って、ゼミの卒業生数人に、Zoomでのインタビューに参加してもらった。

2020年3月卒業のOさん。大手の音楽系エンターテインメント会社。就職活動は3年終わりの3月から。インターンシップは無し。ES等の本格的アプローチは10社ほど。6月1日に内定。これはかなり能率的でうまく行ったケースだと思われる。

同じく2020年3月卒業のAさん。有名転職紹介会社。インターンシップは3年夏休みに2、3箇所。秋学期の週末にも。ただ、「途中で飽きてしまって」、就活は3年終わりの3月から動き出し、アプローチはやはり10社ほど。決まったのは4年の7月後半とのこと。

2021年3月卒業のSさん。IT系の有名メーカー。コロナ禍のなかで、就活としては単発(1day)の(イベントの手伝いのような)インターンシップを夏休みから秋にかけて10社ほど。内定が出たのは4年のはじめ。やはり積極的にアプローチしたのは10社ほど。

2022年3月卒業のNさん。大手飲料メーカー。3年夏休みはインターンシップ多数。秋から冬にかけては単発のインターンシップ、オンラインで2社。3年終わりの3月からESは30社、6月1日で内定。

以上は、上記の現役4年生の例も含めて、いわゆる有名・大手企業への就職の話に過ぎない。そのなかでは、やはりインターンシップが〈3年生の6月から〉という動きは、やはり現役4年生からのように思われる。この学年は前述のように、1年次からサークル活動や授業で上の学年と直接ふれあう機会が極端に少なく、就活の情報についてネットに依存する割合が高いことも考えられなくてはならないだろう。

なお、インターンシップが内定に〈直結〉しているのは、一部の企業に限られ、これまで聞いている限りでは〈コンサル〉の例が多く、比較的古くから知られている有名企業などについては、〈直結〉している様子はいまのところあまり聞かれないという傾向のようだ。

さて、ここまでは、有名・大手企業への就職の話。ユーラシア文化論ゼミでは(べつにユーラシア文化論ゼミに限らないと思うが)、現役生も、卒業生も、卒業後の進路はさまざま。もちろん、各種公務員を目指す人、すでに公務員としてそれなりの地位にいる人も一定数いるし、自分で会社を運営して

いる人も少なくはない。多元文化論系と直結した大学院コースが無いなかでも、大学院に進学を目指す人、すでに博士後期課程に進んでいる人もいる。一方で、在学時代から「働きたくない」ことを公言し、「自由業」ではなく、〈自由〉を業なりわいとしつづけ、もはや10年を経過している猛者もいる。

わたしのような専門分野の者は、授業で教える専門的内容は学生の就職にしたら寄与することがない。演習やゼミの授業で、プレゼンテーションのしかたや、仕事への取り組み方といった、どちらかと言えば抽象的なところでの指導がわずかにできるのに過ぎない。でなければ、就活の愚痴の聞き役に甘んじるのみである。

それでも、わたし自身の学部時代の同級生のことから考えて、35年以上の経験からいつも学生に言っているのは、どんな道を選ぼうと〈自分なりの仕事ができること〉と〈一定の収入が得られること〉が一致する——すなわち、自分の納得できる仕事できて、その対価としてそれなりの収入が得られる——のは大雑把に言って、30歳を待たねば実現はむずかしいと思わねばならないということ。大企業に入れば、4月から月給は確実に入ってくるが、大きな組織のなかでどこに配属されるか、必ずしも希望どおりにならないし、よほどの幸運にめぐまれなければ、最初の何年かは与えられた仕事をこなす段階で、その組織のなかで実力を認められて、自分の仕事を自分でマネジメントできるのには、相当の修業期間が必要だろう。一方、例えば〈もの書き〉などを目指して、自分の生み出したものが〈売れる〉ようになるまでは、バイトなどで生活費を稼ぎ出すしかない。

どちらにしても、〈自分なりの仕事ができること〉と〈一定の収入が得られること〉が一致するのは、年数的にも、また、体力的にも30歳というところがある程度の指標のように思われる。すなわち、本当は〈就活〉もそのあたりの年齢を意識してほしいと思う。自分が30歳になったときのことなど、茫洋としてつかみどころがないと思われるかもしれないが。

しかし、大学卒業後、3年後くらいの転職があたりまえのことになっている様子も見える現在、大学卒業と同時の〈就職〉は決してゴールを意味しない。まして人生80年どころか、100年とも言われている世代では——

長い長い社会人生活の初めと終わりの短期間のものに過ぎない「就活」や「終活」で、勝ちも負けも決まりはしない。大事なのは、そのあいだの長い長い「生」活だと言えば、はたして駄洒落に墮したことになるだろうか。

## なまくら知識の重要性

長谷川隆一

読者の皆様はじめまして。2023年度より多元文化論系講師（任期付）に着任いたしました長谷川隆一と申します。わたくしは博士課程から早稲田大学に参りましたので、今年で7年目になります。おそらく、同じような立場の人と比べれば、早稲田歴は短いと思います。皆様と一緒に過ごすことにより、早稲田大学についてもっと勉強できればと考えています。これからどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



わたくしの専門は、中国哲学です。より端的に言えば、漢魏六朝思想史、となります。ただ、何の問題意識も持たずに中国の古い時代について研究しているわけではなく、その時代の思想家が、「人間をどのように捉えたか／論じたか（＝「人間観」）」に焦点を当て、研究を進めています。

多元文化論系は、「各文化間の影響を常に視野に入れつつ、ある対象を深く研究することを目指す」論系です。これをわたしは、次のように自己流の解釈をしています。「ある対象を丹念に、粘り強く研究しつつ、一方で様々な時代・地域の文化に関する知識を多く接収し、それを自身の専門研究に活かす」と。この意味において、多元文化論系には非常に大きな魅力と可能性が存在していると考えています。

いましがた述べたように、わたしの研究は、中国古代の思想家たちの「人間観」を明らかにすることです。中国哲学の文脈でいえば、「人間観」は性善説・性悪説など、性説を中核として語られることが多いです。事実わたしも、性三品説（人間を上智・中人・下愚に区分し、上智の教化により中人は自身の善性を伸長させられるという思想）というものにこだわって研究しています。しかし、「人間観」とは、そもそも中国哲学に限らず、西洋哲学でも用いられる普遍的な概念です。中国に「人間観」という領域があるのであれば、西洋にもあり、日本にもあり、古今東西時空を超えて存在します。であるならば、中国哲学の本だけを読んでいれば良い訳ではない、ということで、わたくしの読書傾向は、もっぱら専門とは必ずしも関係のないものとなってい

ます。非専門者が専門の本や原典（訳書ですが）を読み、なんとなく知識を集積していく、すなわち「なまくら知識」をどんどん身につけているわけです。

もちろん「なまくら知識」は、学会発表にも、学術論文にも実際には役に立ちません。なんとなく身につけた未熟な知識が役に立つほど、あまい世界ではないからです。ただ、うまく使うことはできていると思っています。

わたくしの頭の中では、ある対象について研究を行う際、常に比較という視座が傍らに存在します。比較の際に頭の中で自然に用いられるのが「なまくら知識」なわけです。「なまくら知識」はどこまでいっても「なまくら知識」であり、実際に戦い（＝学会発表や学術論文執筆、ただ個人的には研究に関する営為を「戦い」とするのはなじみません）の場に持ち込めるものではありません。しかしながら、それを基に比較をすることにより、「わざもの知識」を鍛え上げることができる。そう信じ、なにか知識を得ることができはしないかと、日々乱読を繰り返しています。

以上なにを話してきたのやらという感じではございますが、多元文化論系の良いところから、わたくし自身の研究の話をし、比較の際に用いる「なまくら知識」の重要性を語らせていただきました。最後に、読書の重要性を述べ、この自己紹介的な何かを締めくくりたいと思います。

丸谷才一という人が以前、『快樂としての読書：日本篇』の冒頭で、「わたしたちは本の制覇の時代に生きてある」と言いました。丸谷が亡くなった10年前に比し、情報革命は確実に進んでいます、本の重要性は変わりません。いやむしろ、何らかの知識をある程度正確に得たいと考えれば、本を読むことの重要性は、以前よりも遥かに増していると思います。誤解を招くかもしれないので一応述べておきますと、わたくしが述べている「なまくら知識」とは、知識の発信側が問題なのではなく、知識の受け手である自分自身が非専門であるがゆえに「なまくら」にしてしまうことを指します。とはいえ、「なまくら」にしてしまうことを恐れては何も始まりません。多元文化論系の皆様には、是非時間をたくさん使って読書していただき、たまに論室室に遊びに来て、その感想などをいってもらえるとうれしいです。

## 「世界」を切ること、結ぶこと

三浦 領哉

はじめまして、2023年4月より助手として着任しました三浦 領哉（みうら れいや）と申します。専門は19世紀ロシア音楽思想ですが、西洋音楽、いわゆる「クラシック音楽」全体を研究対象としています。19世紀後半から起こったヨーロッパ周縁地域やアメリカの芸術音楽についてもとても興味があり、現在はそれらを相互に比較する研究にとりかかっています。



そんな私は楽器と言語と旅が大好きで、ありとあらゆる楽器の演奏にトライし（普段はオーケストラ指揮者をしています）、言語とあらば何語であろうともとりあえず興味を持ち、またひとたび興味を持ってばどんなに危ない地域だろうが行ってしまう人間なのですが、その好奇心ゆえに回り道に回り道を重ね、危ない目にも遭いながら、今みなさんと出会うことになりました。

世界の来し方行く末を知りたいと望んで学部では政治学の道を選び、冒険心から特異な政治体制をもつさまざまな国々へ旅行し、ひょんなことから今の世を騒がすロシアとの関わりを持ち、そのロシアで音楽と「再会」し目覚め、8年かけて大学を卒業しました。大学院に入っても迷いに迷い12年。早稲田での生活は今年で21日目になります。研究者としてはまったく褒められた話ではないのですが、回り道に回り道を重ねながら「世界」をさまざまな視点から見てきた、そんな私からみなさんに問いかけたいことがあります。

「多元文化論系」を選んだみなさんに、果たして「世界」はどのように映っていますか。みなさんは「世界」へのご自分の視点を、どのように説明しますか。みなさんにとって「世界」の「中心」はどこにあるのでしょうか。「多元」文化論系を選んだみなさんですから、「世界」は「一つ」ではないことをよく知っていて、何かを通して「一つ」ではない「世界」を見つめていることと思います。その「何か」を通して「世界」を見つめる視点とは、まるでまとまりとして一体であるかのように見える「世界」を切り分けるナイフであると同時に、実際にはバラバラに細分化された「個」同士を結びつける糸でもあります。「世界」はさまざまな単位に分けて考えることができますが、

その究極の細分化とは、つまり「個人」です。私たち「個人」は、人生は一度きりしかなく、また自分は決して他人になれないことを知っています。だとすれば、この絶望的なまでに他者と隔絶した孤独な「個人」は、どのように「世界」を生き延びてきたのでしょうか。

「個人」が「世界」の中に孤立していることは、その人にとって強烈に不安です。ですから人は何らかの共通点を見出し、属性をつくり、集団を生み出し、それを他と峻別します。歴史の中にも、みなさんの人生の中にも思い当たる節があるでしょう。しかし集団の形成は、「個人」に生まれながらにして課された孤独を克服してはくれません。なぜならば、集団は共通点によって作り出されたものである以上、その内部に当然に多様性を内包することになるからです。集団をつくってなお孤独な「個人」は、どのように「世界」との本質的な断絶を克服できるのでしょうか。

人間は先述のような、生まれながらの「孤独」と同時に、それに打ち克ちうる、ある能力を与えられて生まれてきました。それは「想像力」です。私たちは高校生までさまざまな科目で勉強してきました。中には嫌いで苦手な科目もあったと思います。しかしこれらの科目はすべて、私たちの想像力を養ってくれるものでした。数学や理科は「自然に対する」、英語や国語は「他者に対する」、社会は「人間に対する」、芸術は「文化に対する」、そして体育は「命に対する」想像力をみなさんに与えてくれたはずです。

どうかみなさん、多元文化論系でこれらの想像力をさらに養ってください。それも本ばかりでなく、種々のメディアや日常生活からも。「知識」同士を想像力で結び、「知識」を「知恵」へと昇華してください。そして養った想像力をふくらませ、「世界」を見つめ続けてください。それは学業や研究のみならず、必ずやみなさんの「生」をよりすてきなものにしてくれるはずです。

2015年国連サミット以来、SDGsが盛んに叫ばれていますが、わけても「多様性」をめぐる議論がさまざまな分野で沸騰しています。「多元」文化論系のみなさんには自明なことでしょうが、「多様性」とは、単に「みんな別々でいいよね」という話ではなく、「多様な」文化・習慣・指向…をもつ「世界」に対して私たちがどのような視点をもち、「多様な」ものたちを結びつけていけるかという問いでもあります。みなさんの豊かな「想像力」をもって「世界」を見つめ、結びつけると同時に、「想像力」を「創造力」へと変え、既存の「誰かが書いた何か」に縛られるのではなく、それを乗り越えてみなさん自身の視点や思考を見つけてください。精一杯、お手伝いさせていただきます。どうぞお気軽に、論系室に立ち寄り（学業上に限らず）ご相談ください。

## 私の履歴書（抄）

山吉 頌平

春から多元文化論系の助手になりました、山吉頌平（やまよし しょうへい）です。富山県高岡市の出身で、高校卒業後に東京にやってきました。私が主に研究しているのは、寺社縁起と称される、寺や神社の起源にまつわる



物語です。なぜこの分野を研究しようと思ったのか、というと、これは偶然の出会いがきっかけでした。私はなぜか学者になりたいという夢を幼稚園のころから持っていました。その内容は転々としており、動物、恐竜、歴史、…というように、研究したいと思う内容は年を重ねるうちに変わっていききましたが、早稲田の文学部に入る頃には哲学、思想に関心を抱いていました。その中でも、日本人の思想に興味を強く持つようになり、日本の古典文献そのものを精緻に読解する力を養いたいという思いから、2年次には日本語・日本文学コースに進級しました。その2年生のころだったかと思います。私は上野の国立博物館に出かけました。ちょうど地方の地誌などを展示する小特集が行われていました。展示物の中に『立山略縁起』なるものを見つけました。富山の霊山、立山の由来を記す、江戸時代の刷り物で、はじめて見るものでした。当時、くずし字の読み方をどうにか読めるようになった頃だったので、苦心しながら中身を読み始めていきました。

仰天照大神宮此世界を開闢し給ふ時立山御姥三尊は右の御手に五穀を納左の御手には麻の種を執持し則越中立山芦嶺に天降りたまへ五穀麻の種を法界に弘め一切衆生の衣食をあたへ…（原文ママ、あえて句読点も付さない）

はじめにも書きましたように、私は富山県で生まれ育ちました。しかしながら、小さなころから仰ぎ見てきた立山に、「御姥三尊」という神（しかも、「姥」の字は原本では女偏に田を三つ重ねる異体字）がいて、天から地上に農

耕をもたらした、という「神話」が存在するなど、まったく知らないことでした。中学高校で学ぶ古典の授業でも、郷土の歴史を学ぶ社会科の授業でも一切触れられることのなかった摩訶不思議な物語。その時の驚きは今でもありありと覚えています。その後、図書館でいろいろな本を読んで調べているうちに、いわゆる神話というものが、古代だけのものではなく、時代とともに読み替えられ、解釈し直されていき、「中世神話」と便宜上呼ばれる物語群が生み出されていたことを知りました。それらの物語を現代の視点から見ると、よく言えば想像力豊か、悪く言えば無理無体に理屈をつけた話も多く、史実からも「正しい」神道の教えからも遠くかけ離れており、また、「文学」という枠組みをも逸脱していることもあり、日本文学史からも長らく除外されてきました。立山の姥尊にまつわる縁起も、在地の伝承に仏教の教理や他地域の民間信仰が加えられて成長していったもので、この神を祭る芦峯寺の正統性を訴えるための新説なども組み込まれているものでした。ですので、「古典」として教科書に載ることなどありえず、義務教育で学ぶ機会がなかったのは当然のことでした。

その後、卒業論文の主題に立山縁起を選び、竹本幹夫先生からご指導をいただきました。大学院進学後は、研究の範囲を北陸の霊山や寺社に広げました。今は偽書の問題をも扱っていますが、これも立山縁起などを読んでいくうちに、今まで本物と見なされてきた史料がどうも怪しい、と思うようになり、偽作説を追求していくうちにそちらに比重が置かれていくかたちとなったものです。こうして振り返ってみると、計画性もなく興味の赴くままに好き勝手に研究してきたものだと思えますが、自分の好きなものをきわめていく、この面白さは何物にも代えがたいものでした（この「海図にない海を帆走」する旅は、米国への留学、帰国後の国会議員事務所での行儀見習い…と続きますが、長くなるので割愛）。

多元文化論系は、そもそもはじめから広範囲の事物を扱うことを前提としており、どのゼミ、授業を選んでも、未知のものに触れる機会がふんだんに用意されていると思います。一つのものに職人気質でこつこつと向かいあうのも大切なことです。しかし、皆さんは面白いものにあふれた恵まれた環境にいらっしゃるのですから、serendipity（意図しない、素晴らしいめぐり合わせ）に重きをおいて、今の自分にしかできない破天荒な知の冒険に踏み出してみたいかがででしょうか。私たち論系室の者も、皆さんの挑戦を全力でお支えます。

[編集後記]

ニューズレター第 8 号をお届けします。ニューズレターは第 6 号まで春・秋の年 2 回発行していましたが、編集担当の源の怠慢もあり、第 7 号、第 8 号とあいだが空いてしまいました。本号では、JCuIP の最も新しいメンバーであるクリストファー先生と、今年度から論系室スタッフとして着任した 3 人のみなさんに執筆をお願いしています。[源]

---

## 多元文化論系 ニューズレター 第 8 号

2023 年 6 月 21 日 発行

編集代表 源 貴志

発行 早稲田大学 文化構想学部 多元文化論系

Web 掲載 PDF 版

---

**Transcultural Studies** *Newsletter № 8*  
*Spring 2023*